◇随筆・近況◇

「地理量」の発見

浅井辰郎

この夏から秋にかけては書くものが多くて忙しかった。当初の日程では7月末までに今西錦司博士古稀記念論文，8月半ばには日本気象学会仙台大会予稿，下旬には日本地理学会広島大会予稿と朝倉書店の世界地理ヨーロッパ中のアイスランド，9月末日までにお茶の水女子大学人文科学紀要にアイスランドの気候Ⅲが控えていた。話は最初の今西記念論文に関係するのだが，7月半に出版社から「都合により〆切は8月末にする」と云ってきた。ヤレヤレと思ったのが間違いの元で．8月末には4つが重なって小・中学校当時の宿題よろしく，連日の捻り鉢巻。その上1年生の巡検を控えてその準備に追われたり，老父の本の校正に3日3晩没頭したり，小宅の建築資金繰りに駆け廻ったりもした。結局，〆切の厳しさに応じて順を入れかえるという浅間しい結果にも相成った。

さて今西氏とは昭和13年の内蒙古，昭和16年のボナペで行を倶にし，いろいろ探検・調査に関して指教をうけたので，気候学と生態学の間に立つ土地生産力の小論文を前々から予定していた。ところがこれは中央公論社から広く自然史・山岳関係の学者・一般人に向けて出版されると判ってきたので，余り狭い事実論文よりも，ある展望と思想を含み，しかも具体性のある提言がよかろうと独り合点するに到った。そうなると寝ても覚めても題目と内容が気になり出した。

10月3日は浅海先生が2ケ月の豪州・新西蘭旅行に早朝羽田を出発される日であった。7時，朝日の爽やかに差し込む目蒲線で蒲田に向う車中，土地生産力という量をいかに学問の中に位置づけながら書こうかと考えていると，突如，『気温と収量というような相関量は今までに地理学でずい分多く発表されているではないか〆→しかしそれらたくさんの相関量を，まとまった形で一覧できる書物はないではないか→そう云えば外国にもそんなハンドブックは確かにない。だから地理学は科学でないと云われたりするのか？→それを有志の協力で作ろうではないか→その本は何と名付けたらよいか？→物理学には「物理量」という総括語がある。「地理量」ではどうか〆……』というようにほんの瞬間的に正に天啓のように，「地理量」の語が頭に閃めいた。こうして題目は「『地理量』概念の設定と気候学・生態学象限におけるその実例 ── 日本とアイスランドの農業を

基にして ― 」と決り，その後の執筆はすらすらと進んだ。

「地理量」は，上述のように地理学的諸要素の相関量で，例えば雨と侵食量，風と災害量，気温と生産カロリー，人口と都市面積，工業と都市力，GNPと農業の労働生産性……，つまり自然と自然，人文と人文，自然と人文に及ぶ広汎な相関量である。そしてこれは恐らく何千とあろう。これらがまとまって通覧できれば，どんなに地理学自身のためにも，また周辺科学のためにも貢献するだろうか。

筆者の予想から云うと，「零の発見」が数学に与えた意義と，「地理量」の編集・出版が地理学に与えるはずの科学的意義とは，勝るとも劣らないと考えるのである。もうこれに関して科学研究費の申請もすませた。その採択について「神々よ照覧あれ」という気持で今はいる。

ニュージーランドだより

浅　海　重　夫

ニュージーランドに行ってきますというと，いい所だそうですねえとうらやましがる人と，なんでそんな所へ行くのかと半ばあきれ顔の人とふた通りあった。どちらもこの国のことを必ずしもよくは知らず，また私の訪問の意図を知るよしもないのだから無理はないが，ひと月余りこの国を歩き廻った今，帰国したらさっそくに，よい国ですが人によってはつまらない所と思うかも知れませんと答えるつもりでいる。自然は多様だが人間の歴史は浅く，どの町もどこの人も皆画一的に見える。物騒な話や面白い事件もなくて，国民はのんびり自分たちの生活を楽しんでいる。日本と同緯度で同じ環太平洋造山帯の小さな島国であり乍ら，なぜこうも違うのかと思うことが沢山ある。一見似ていて実は大違いというのを探しながら歩けば，結構退屈しないでいられる。

北島には多くの火山が分布し，富士山と相似のマウントエグモント，温泉やスキーの行楽地ロトルアの他，日本の火山地域と同様なテフラの累層も随所にみられるが，活火山は日本より少しおだやかで，地震もそれ程脅威的な存在ではない。火山灰土壌は日本の関東ロームの土壌と土性・構造の上でかなり違う。風化・土壌化の速度と経過の長さの違いによるらしい。北島の北端近くには亜熱帯植物が分布し，オークランド周辺の海岸低地にはマングローブが茂っている。南島にはすばらしい山岳氷河があり，この点は日本とは真向から違っているが，南半球におけるこの氷河も現在